

様式第5号

出張調査報告書

平成30年8月9日

松伏町議会議長 川上力様

会派名 自民クラブ

代表者名 松岡高志











下記のとおり、先進地視察をしたので届け出ます。

記

1 期 日	平成30年7月16日から平成30年7月18日まで
2 視 察 地	(1) 北海道夕張市 7月16日(月) (2) 北海道上富良野町 7月17日(火) (3) 北海道東川町 7月18日(水)
3 視 察 目 的	(1) 夕張市の再建状況 (2) 地域ブランド・人材育成アカデミー・町民協働の地域 主導型観光の取り組み、後藤純男美術館訪問 (3) 「写真文化都市宣言」写真の町30年の概要、ひがしか わ株主制度(ふるさと納税)の概要、人口増の取り組み
4 視 察 者 氏 名	松岡高志、高橋昭男、佐藤永子、田口義博、増田等
5 視 察 結 果	行程、視察結果は別紙のとおり

自民クラブ 行政視察日程・行程
 (北海道夕張市・上富良野町・東川町)
 視察スケジュール

日時	内容	備考
1日目 (7/16)	6:45 せんげん台駅集合	
	7:00 せんげん台駅出発	
	8:40 羽田空港国内線ターミナル到着	
	9:30 羽田空港出発 ↓	
	11:05 札幌千歳空港到着 ↓ 夕張市経由	
18:00 上富良野町 到着 上富良野町内泊		JAL509 便 ※レンタカー移動 146km (160分) 夕張市視察
2日目 (7/17)	9:00 宿泊先ホテル出発 ↓	
	10:45 後藤純男美術館 到着 (視察) 11:00~12:00	
	12:00 (昼食)	
	13:00 美術館出発 ↓	
	13:15 上富良野町役場 到着 (視察研修) 13:30~15:30	
	15:45 上富良野町役場 出発 ↓	
	16:45 東川町 到着 東川町内泊	
3日目 (7/18)	8:45 宿泊先ホテル出発 ↓	
	9:15 東川町役場 到着 (視察研修) 9:30~11:30	
	11:40 東川町役場 出発 ↓ (昼食)	
	12:30 旭川空港到着	
	13:10 旭川空港出発 ↓	
	14:55 羽田空港到着	
	15:10 羽田空港国内線ターミナル駅発	
	16:50 せんげん台駅着	
	17:00 解散	

5 視察結果

(1) 北海道夕張市 (平成30年7月16日)

夕張市は急激な人口減と高齢化が進み、2007年準用財政再建団体となり、3年後の2010年、自治体財政健全化法に基づき財政再生団体となった。353億円もの借金を抱え、かつて炭坑として栄え、最盛期(1960年)に12万人近くいた住民は、今では1万人を割り(平成30年5月現在



8267人)、高齢化率は約50%になる。松伏町の47倍の広い面積を持つ夕張市では、中学校、小学校とも1校に集約、市役所の出先機関等を廃止して市の職員数は85人に、図書館・美術館は休廃止、市立総合病院は診療所に縮小など、多くの再生事業を行っている。借金(再生振替特例債)償還は2027年3月に完了見込みである。観光施設について石炭の歴史村は閉園、夕張市石炭博物館、幸福の黄色いハンカチ思い出ひろばは市から指定管理者に委任して運営を続けている。

《視察内容・所感》

日本の未来図ともいわれている夕張市に視察をお願いしたが、受け入れは年数回のみで指定された日となっていることから、今回は市街地や公共施設、観光施設等の現状を車窓から伺うことでの視察となった。

視察日、夕張市の中心市街地である、夕張駅周辺の人通りは観光客以外ほとんどなく、指定管理者委託で運営を行っている夕張市石炭博物館、幸福の黄色いハンカチ思い出ひろばも観光シーズンにもかかわらず駐車場の車の台数は少なかった。広大な面積の市施設平和運動公園は芝生等の維持管理はきれいにされていたが、当日の公園は閑散としていた。

人口減少は、税収が減り、行政サービスを維持できなることを意味するが、急速にすすむ少子高齢化社会に向かって財政が厳しさを増す中、夕張市は公共施設の運営やまちづくりに住民が積極的に関与し、住民協働のまちづくりは夕張市がむしろ先進地といわれている。今後、この点について情報収集し、本町のまちづくりの参考にしていきたいと考える。

(2) 北海道上富良野町（平成 30 年 7 月 17 日）

上富良野町は、北海道のほぼ真ん中のまち、基幹産業は農業で1戸当たりの耕作面積は約20haと田んぼ200枚相当が平均耕作である。

秀峰十勝岳のふもとにある富良野は、四季折々の景観を見ることができ、この時期はラベンダーが最盛期を迎え、道外からも観光客で賑わっていた。

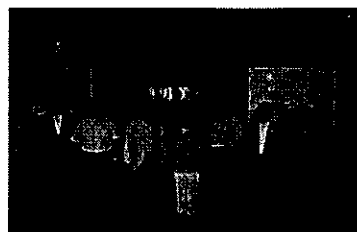
議会議員数は、14名で、松伏町と同様2常任委員会であるが、予算・決算は特別委員会に付託し、委員長が報告する方法となっている。

人口は、30年3月末で10,851人、世帯数5328世帯である。

後藤純男美術館（上富良野町）を訪問。

名誉町民である後藤純男画伯の美術館を訪れ、行定館長から1点1点、絵画や資料の説明を受ける。

左3番目：行定館長



上富良野町役場にて町長、議長のあいさつの後、担当課長より説明を受ける。

『産業賑わいまちづくりの取組』

「かみふらのポーク」「まるごとふらのプレミアムビール」等地域ブランドの立ち上げの経緯は

開拓後、数年で養豚が始まり、昭和32年、町営のと畜場を開設、畜産を取入れた複合農業の奨励・振興を図ってきた。

富良野地域最大規模の食肉センター（町営）を昭和63年(株)かみふらの工房に譲渡、加工製造能力9,200トン/年。



向山上富良野町長あいさつ

奥は西村議長

経営悪化や後継者不足、安値による養豚廃業が相次ぐ中、昭和62年企業養豚牧場進出、平成7年に上富良野産豚肉販売推進協議会を生産者、加工会社、JA、行政で設立、品質の向上と安定を図るため飼養管理の徹底、PR活動などを展開しブランド化したのが「豚サガリ」。

今では、約40,000頭の飼育、出荷頭数約70,000頭。

道内飲食店、道内外大手スーパー等に販売している。

プレミアムビールに関して

道内唯一のホップの生産地で、ビール麦(二条大麦)の生産(日本一)。サッポロビールとの歴史的なつながりがあった。

ところに……

平成18年時のJA、商工会、観光協会の長の宴席から

- ・上富良野産原料100%のビールを造って、皆で飲むべ
- ・そりゃーいいな、飲むべ飲むべ
- ・サッポロビールさんに造ってもらうべ
- ・その年の8月、第1回のビアガーデンが開催される。

10年後、活動の目的を明確にし、商品として経済行為につなげられないか、地域ブランドとしての活用に、つなげられないかを協議する実行委員会を設置する。生活者、生産者、活動者間の交流と相互理解を図るため。

商品として、13事業所で1,3500の活用ができた。ただ、通常商品と比較して約2倍の価格、10当たり200円を助成する。

5年目からピン商品を販売 価格は税込み620円/本、330ml/本
ラベルは、後藤純男画伯の「十勝岳連邦」をデザインに使用。

約4,400本を小売店、観光施設で限定販売した。

人材アカデミーの取組

- ねらい…
- ①地域内の異業種同世代の交流と相互理解の進展
 - ②まちづくりの中核となる人材を育成
 - ③参加者の交流が連携へと発展することに期待
 - ④まちづくりのエネルギーとして昇華すること

～成果を求めず、つながりが生まれるだけで良い～

第1期を 平成25年度～平成27年度 (延べ参加人数163名)

- 運営方法をコンサルに委託
- ①基本講座
 - ②起業化講座

第2期 平成28年度～平成30年度

内容が見つからないことから、総花的な研修から産業分野毎に特化した内容にした。

運営方法は、構成機関による協議会にした。

- 1 農業分野 スマート農業導入研修
ビジネスモデルと現経営
- 2 商工業分野 地域資源を生かした商品づくり
事業者継承促進
- 3 観光分野 観光プログラムの企画開発
閑散期対策

成 果

刺激となり、人脈形成、知り合いが増え、交流が継続。
新規開業、新展開事業への助成支援(補助率1/2以内、上限150万円)
5件助成

「地域主導型観光」の取組

①かみふらの十勝岳ヒルクライム

実行委員会主催による、標高差1050Mを一気に駆け上がる長ハードな自転車レースを平成26年から開催。

参加費と、協賛金で運営、200名の参加者と周辺住民や町内の飲食店に、フードブースの設置。

②後藤純男美術館と農業体験

美術館とホップ農家とのコラボ

昨年度約800名参加 ホップの摘み体験、美術館見学、美術館レストランで「まるごと かみふらの」を堪能。

③地域の食材資源を生かす

どぶろく、ワイン、にんじんジュース、ミニトマトジュースなど開発

何ととっても、ラベンダーの町。町の意気込みが感じられた。

《所感》

上富良野町は町民との協働で観光による地域づくりを進めている。例えば、「農家が農業体験のような形で観光客を受け入れる、地域の特産品（かみふらののポーク、プレミアムビール）を観光客が買う、後藤純男美術館に訪れる、地域（美術館内等）の飲食店で上富良野ならではの素材を使用した昼食をとる」観光振興をそのまま地域振興につなげ、大きな経済波及効果を生み出している。

上富良野町の固有の資源を活かした観光地域づくり「地域主導型観光」によって、町が抱える課題の「定住人口の減少及び少子高齢化の進展」「地域商業の活性化」「地域産品の市場化」「一次産業の維持・活性化」等の解決・地域経済の活性化につなげている。

松伏町も同様な課題を抱えており、上富良野町と同じく農業が主産業である本町の人口減対策・地方創生事業の推進において、参考になる点が多く見られた。今後も上富良野町の取り組みを注視していきたいと思う。

2) 北海道東川町 (平成 30 年 7 月 18 日)

旭川市より南に隣接した東川町を視察する。

平成 5 年度は 7, 000 人を切ったが、民間住宅分譲、空き家住宅を飲食店等のオープンと移住が増え、毎年増え続けて今年 6 月末の人口は 8, 344 人の町である。

毎年 50 名前後の出産が見られる。

全国的にも上水道がない町で、20m を掘ると水が出るという。

大雪旭岳源水は、ミネラルが豊富にバランスよく含まれ、水温も約 6~7 度と通念を通して一定。湧出量 1 分間に約 4600ℓ と湧き出ている。

ミネラル豊富な天然水と肥沃な水田で育てられた「東川米ゆめびりか」を無洗米にし、天然水をセットにした商品、平成 25 年 5 月特許庁「地域団体商標登録」。

また、木工業も盛んで家具職人や木工クラフトマンが匠の技で芸術性の高い家具、クラフトを生産している。

(1) 「写真文化都市宣言」写真のまち 30 年の概要

開拓 90 年を迎え、「町民が参加し、後世に残せるまちづくり」を模索。

1985 年 6 月、モノではなく文化でまちづくりを目指し、世界にも類のない「写真の町」宣言を行い、条例も創り、「自然・文化」そして「人と人の出会い」を大切に「写真写りの良い町づくり」を進めてきた。

2014 年には「写真文化都市」を宣言、世界中の笑顔があふれる町づくりに取り組んでいる。

◆写真の町宣言◆

「自然と「人」、人と「文化」、人と「人」それぞれの出会いの中に感動が生まれます。

そのとき、それぞれの迫間に風のようにカメラがあるなら、人は、その出会いを永遠に手中にし、幾多の人々に感動を与え、分かちあうことができるのです。

そして、「出会い」と「写真」が結実するとき、人間を謳い、自然を讃える感動の物語がはじまり、誰もが、言葉を超越した詩人やコミュニケーションの名手に生まれかわるのです。

東川町に住むわたくしたちは、その素晴らしい感動をかたちづくるために四季折々に別世界を創造し植物や動物たちが息づく、雄大な自然環境と、風光明媚な景観を未来永劫に保ち、先人たちから受け継ぎ、共に培った、美しい風土と、豊かな心をさらに育み、この恵まれた大地に、世界の人々に開かれた町、心のこもった「写真映りのよい」町の創造をめざします。

そして、今、ここに、世界に向け、東川町「写真の町」誕生を宣言します。

1985 年 6 月 1 日 北海道上川郡東川町

東川町国際写真フェスティバルの開催

実行委員会に2000万円ほどの助成金。

これまでに140名受賞する。

- ・海外作家賞 (33名受賞)
- ・国内作家賞 (34名受賞)
- ・新人作家賞 (32名受賞)
- ・特別作家賞 (33名受賞)
- ・飛騨野数右衛門賞 (8名受賞) (第26回より)

写真甲子園「全国高等学校写真選手権大会」

写真の町10年目に全国の高校写真部に写真の創作を通じて、出会いや交流の機会提供し、写真の魅力と感動を伝える大会として1994年に始まったもの。現在全国から513校の応募がある。

《初戦審査》

8枚の組写真を募集し審査を行い、その中から優れた作品を寄せた高校がブロック別公開審査会進出校に選抜する。

《ブロック審査会》

全国11ブロックで公開審査会が開催され、本戦出場する代表校を決定。

《本戦大会》

ブロック代表校は、3人一組の代表選手が北海道のフィールドを舞台に開催される「写真甲子園」で熱い戦いを繰り広げる。

この他、写真少年団、小学生写真ワークショップなどがあります。

どの事業も、ボランティアの協力無くしては成り立ちません。

企画委員(町内外30名)は年間を通じ、写真の町課と連携した企画運営を行っている。

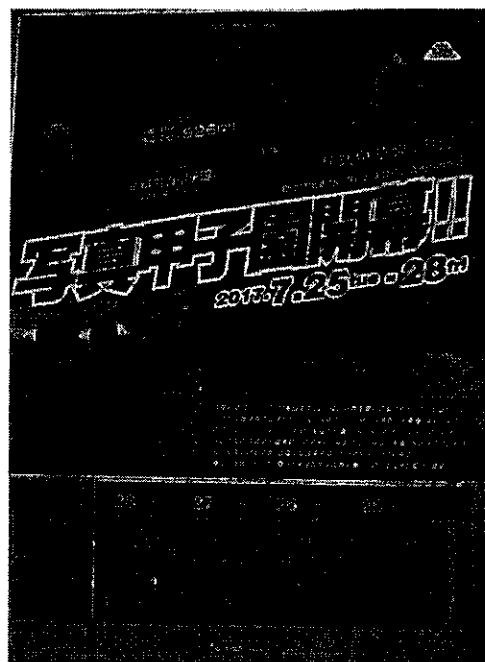
(2) ひがしかわ株主制度(ふるさと納税)の概要

「写真の町」のふるさと納税は、納税でなく投資。

株主と共に町の将来を育てていく

人と人との出会いを大切に、

「写真写りの良い町づくり」を進めてきた。



株主証と町民認定書

「寄附」を「投資」、「寄付者」を「株主」として、
町の未来を株主と共に育てていく「ひがしかわ株主制度」を創設した。
特色ある投資事業 株主は応援したい事業に投資する。(目標額を示す)

- ・写真の町プロジェクト (4事業) 1.3億5000万円
- ・E C Oプロジェクト (1事業) 50万円
- ・イイコト プロジェクト (4事業) 4億100万円
- ・こども プロジェクト (1事業) 500万円

2018年3月31日現在

ブロック別 実人数	地区	北海道	東北	関東	中部・東海	23,072 人
	株主数	6,222人	387人	9964人	1890人	
	保有株数	164958株	10935株	267954株	48329株	
	地区	西蔵	中国	四国	九州・沖縄	
	株主数	3,236人	439人	195人	739人	
	保有株数	72581株	11410株	6457株	19369株	

投資額 600,810,001円 入金済延べ人数30,337人

株主の取組

- ①株主には、株主証、特別町民認定書の贈呈
様々な特典、地元を中心に民間企業と連携したサービスが受けられる
- ②無料宿泊施設を提供 年間6泊まで
28年度 株主利用者数 190組(486人)
27年度 " 176組(457人)
- ③東川町に集い、まちづくりに参加
株主総会の開催、田んぼのオーナーとなり、収穫後に農産物をお届けするサービス。(別料金) ファームの申し込み 239人
ワインの申し込み 78人

事業実施報告

高校生写真日本一を決める「写真甲子園」を映画化。全国44か所で放映。

今後の展開

映画「写真甲子園 0.5秒の夏」の海外上映と地域上映
写真甲子園そして「写真の町」を世界へ発信する。
海外は ロシア、東アジアをはじめとする2から3ヶ国程度上映予定
国内は 株主制度による地域上映を募集

(3) 人口増加「移住定住促進政策」の取組

写真の町事業や核関連施策の実施により、目標人口8000人を超える。
美しい景観と住みやすい環境を生かし、クラフトや家具、写真などの文化的な仕事をしながら生活をされる方、ここ5、6年は飲食店、パンや、雑貨店を開店されるケースが増えているとか。

景観住宅建築支援事業（H18～）や新規企業者への支援事業（H15～）

新規企業者への支援事業の実績 95件 83,475千円

H25から ○民間賃貸住宅建築支援事業

H26から ○きた住まいる建設推進事業補助金（上限150万円）

4年間の実績 73件 142,073千円

○二世帯住居推進事業補助金（上限100万円）

4年間の実績 4件 4,000千円

○薪ストーブ等設置補助金（上限50万円）

4年間の実績 67件 27,992千円

H27から ○高齢者世帯住宅リフォーム支援事業補助金（上限25万円）

3年間の実績 252件 98,140千円

婚姻届・出生届

新婚姻届は 大きな「とき」と「思い」を詰め込んだ記念品として、結婚する2人に贈られる。

入籍の際、夫婦になった瞬間の写真を撮影してプレゼント。記念のメッセージシートにメッセージを残し写真と共に、「写真の町」東川文化ギャラリーに保存。

出生届は 2005年11月からスタートした。

君の椅子

誕生する子供を迎える喜びを、地域の人々で分かち合いたい。

「ようこそ。君の居場所はここにあるよ」

そんな会話から、始まった取り組みは7町村にまで広がった。

生後100日を過ぎてプレゼント。

君の椅子には、東川の手作り椅子を通じて子どもの成長を温かく見守りたい、そんな気持ちが込められていると言う。



幼児センター・子育て支援センター

構造改革特区「東川町幼保一元化特区」の認定を受け、平成16年4月より本格実施する。現在248名が利用。

所得640万円未満 2人目半額、3人目無料となる。

中学校の椅子贈呈

入学時に名前の入った新しい椅子が渡され、卒業時に3年間使用した椅子をプレゼント。

日本語教育事業（留学生・研修生受け入れ）

2009年から実施している町主催の短期日本語・日本文化研修事業は、東アジア諸国を中心に16カ国、延べ1800人を超え、町の経済発展と国際交流に大きく貢献している。

2015年10月には旧東川小学校校舎を利用した、日本初の「東川町立東川日本語学校」を開設した。

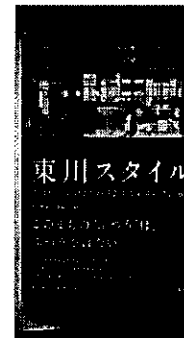
質疑の中で、予算は約4億円ほどとか。PRするための費用2000万円。

東川スタイル・東川町ものがたり

東川スタイルの本を発行する。

サブタイトル

「このまちの“ふつう”は ふつうではない」



東川町のめざす姿は

写真文化と国際交流を通じて世界に開かれた
人・自然・文化が調和した活力と潤いに満ちたまちづくり

蓄積された特徴と魅力



写真文化・家具デザイン文化・大雪山文化



交流人口の増加

目指すべき姿



多くの人が集い、誰もが生き生きと暮らす文化あふれる 写真文化首都の創造

《所感》

東川町は中核都市旭川市のベットタウンで位置的に恵まれているが、人口増の要因は「子育ては東川町が良い」と若者に評価される積極的な事業展開によるものが大きいと思われる。

東川町は「自然と人」「人と文化」「人と人」それぞれの出会いの中に感動が生まれる「写真の町」を宣言し、写真文化を通じて潤いと活力ある町づくりに取り組んでいる。さらに、大雪山の麓の町らしく、美しい自然景観と住みやすい環境、美味しいミネラル豊富な湧水で暮らせる、全国的にも稀な「地下水」の町としてアピールをすると共に、宅地造成分譲、民間アパートの建築支援、店舗や工房などの起業家を積極的に支援し続けて人口増加につなげてきている。

年間4億円事業の「東川町立東川日本語学校」は、海外からの人の流れをつくり、町の経済発展と国際交流に大きく寄与し、留学生・研修生は、町に年間10万泊し、町の経済活性化に貢献している。「写真の町」により構築された写真関係を越えたネットワークと併せて、世界に開かれた情報発信ネットワークを有することが定住人口・交流人口の増加につながる町の強みになっている。

また、東川町の成功は、「写真の町」宣言から30年かけて事業を継続しているからである。「町おこし」が一過性のプロジェクトでなく、条例として公式に制定し、継続するしかない仕組みを作り、継続によって町の価値を向上させている先見の明がある。

そして、東川町は文化資産として、「写真文化」「大雪山文化」「家具デザイン文化」を創り上げている。官民一体で取り組む成功例として大きく評価できるとともに東川町が発信する将来ビジョンの明確さに感心させられた。

松伏町の人口減対策にとって東川町の写真の町33年の成果とめざすべき姿は大いに参考になるものであり、本町においても文化を創造し、文化資産の構築を目指し、それによって、町の価値を高め人口増につながるよう議論を進めていく必要があると感じた。

